【連載】
老健仕事人　看護師

# 「仕事人」への目覚め


藤田康博［ふじた・やすひろ］
介護老人保健施設三川しんあい園
（新潟県）

## はじめに

『必殺仕事人』といえば、皆さんが思い浮かべるのは中村主水が率いる仕事人たちではないだろうか。報酬を受け取り闇に紛れ確実に仕事を遂行する。

皆さんのもつ「仕事人」という言葉のイメージは、「できる人」であろう。

この話は看護師免許を取得し28年、精神科で20年（主に急性期病棟勤務）、その後、老健施設に８年勤務している私が「できる人」をめざし、「看護人」から「看護師」へと成長していく物語である。

## 施設紹介

当施設がある新潟県東蒲原郡阿賀町は高齢化率が51.5%（2023年10月１日現在）で新潟県第１位。東蒲原郡唯一の老健施設として自然が豊かすぎる三川の地にひっそりと立つのが「三川しんあい園」だ。

春は山々の新緑がとてもきれいで空気も澄み、夏はクソ暑くて（笑）アブは多いわ、猿は巡回しているわ、熊は出るわで（汗）、この季節は野生の動物を追い払う空砲の音がよく聞こえるところだ。猿の巡回ルートに当施設の駐車場があるようで、居室から野生の猿を見ることもできる。秋は紅葉で山が頬を紅く染め、冬はあたり一帯が真っ白に雪化粧をする。そんな大自然のなかにある当施設には、現在は足湯として利用している露天風呂もある。交通アクセスは良く、磐越道三川インターを降りて1分ほどだ。

## 物語の始まり

振り返ってみれば精神科病院に勤めていた20年は、「看護師」ではなく「看護人」だったのではないかと思う。なぜならば精神科での私は、ただ漠然と患者の話を聞き、決められた日常業務をこなしていただけだったからだ。もちろん、患者の日々の精神状態や行動を観察したり、薬の副作用などを観察し医師に報告したり、日常生活の援助などを行ったりしていたが、「それだけ」であった。そこから深掘りせず、上辺だけの業務をこなしていたように思う。

別に看護師じゃなくてもできるんじゃないか？もっと看護師としての専門的な知識をもって体系的に問題点をまとめ、より専門的な看護をしなきゃいけないのではないか？そんな葛藤はあったが、潜在的な面倒くさいという思いや日々の業務に流され、そこから一歩を踏み出そうとはせずに、漫然と毎日を過ごしていたように思う。

20年が経ち転勤の辞令がきた。転勤先は新潟市秋葉区の精神科病院であった。当法人は新潟市西区と秋葉区に精神科病院があり、新潟市と阿賀町に老健施設がある。転勤先は精神科急性期治療病棟で、原則90日以内の退院をめざす病棟だ。転勤後は西区の病院にいたときと少し異なる業務や手順を覚えるのに必死だった。そして３か月が経とうとしたある日、大きな転機が訪れる。

## 阿賀町へ

ある日、上司から三川しんあい園に急遽欠員ができたので行ってくれないかという話があり、私は戸惑いながらも了承し、新たな地へと向かう。秋葉区にいた期間はまさに90日で、私にとってもまさに急性期のような転勤であった。

ちょうど夏のまっただなか、８月１日付けで老健施設に転勤となった。忘れもしない、その日はアブがひっきりなしに車をノックしてきたのを…。

## さなぎへ

三川しんあい園に来て最初に配属されたのが雪美館である。当施設は認知症の程度により、認知症状の軽い雪美館と症状の重い月美館に分かれている。